
僕(変態) と君たち(変態) の相談部

めりめり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕（変態） と君たち（変態） の相談部

【Nコード】

N8683Y

【作者名】

めりめり

【あらすじ】

僕が主人公の、ウハウハハーレムもの！！

…
…
…

すみません調子乗りました。

本当は、僕（変態）と他の君達（変態）が織り成す、相談青春ラブコメディ。え？ラブはない？気にするな

とりあえず、皆、変態です

・エピソード・（前書き）

変態です

シモネタもちよいあります。

間違っても爽やかイケメンは出ません

・エピソード・

「横島君って、変態だよねえ？ちよつとそこを見込んで相談があるんだけど」

高校二年生になって一日目の僕・横島宗^{よこしまはじめ}は人生で、157回目の『変態』を言われた。

『変態』

僕はこの言葉のくくりに入れられる人間らしい。

あ、ちなみに僕が言っている『変態』は、幼虫が蛹へ移行するあれじゃなくて、特殊性癖的な人間を指す『変態』の方だ。ここ重要。と、まあ、話を戻して、僕が変態だという話だ。

あと、これ、言ってる何となく微妙に落ち込むが、まあ今は置いておこう。

・・・さて、まず僕が変態であるという理由だが、。。。

まあ、自分を客観的に見て、157回変態と言われてれば意識せざるを得ないだろう。

理由はそれだけ。

いや、もう少し理由があったりするけど、今は関係ない。

僕が言いたいのはそこではない。

僕が言いたいのは、その変態という部分が、なぜか知らんが役に立ったということだ。

具体的に言うと、同クラスの美少女から話しかけられるなんて主人公的イベントが、僕の変態性によって引き起こされた事についてだ。「横島君にちよつと来て欲しいところがあるんだあ」

記念すべき157回目の変態発言をした美少女は、いきなりそんなことを言っつて、勝手に歩き始める。というか、この少女は出会っつて二言目に付いてこいなど言っつて、付いてくる人間がいると思っつて

いるのだろうか？

……勿論僕は黙って付いていくけど。そもそも美少女の後ろを本人公認でついていけるなんてイベント、僕が見逃すわけじゃないじゃないか。

それに、彼女の制服の着こなし方。これを見て、彼女を黙って見送れる人間など存在するだろうか。

膝上まである黒いニーハイソックス。更にその数センチ上で揺れるスカート。その間に見える白い太腿。生肉！

上は明るい茶色のセーター。それを、彼女はサイズを合わせずに着ている。つまり、ダボダボ。これは！これは！

……お分かりいただけただろうか。

彼女の制服の着方が、一部の人に熱狂的支持を与える着方だということに。

その一部には勿論僕も含まれる。

「く…絶対領域。。。最高すぎる…ッ！」

僕はグッと拳を固める。だって、絶対領域だぞ！？興奮せずして何が男か！

しかし、こういうことを語ると

『えー、たった数センチの、しかも太腿に興奮してるわけ？』

などと言ってくる奴が往々にいるが、あいつらは盛大に勘違いしている。

まず一つとして、胸「おっぱい」や【倫理問題的に自主規制させてもらいます】が見えることがエロい訳じゃない。

胸「おっぱい」。この響きは確かにいい。いや、最高だ。

【倫理問題的に（略）】も確かに、良いときもある。

だが、例えば、美術館などに飾ってある裸婦画を見て興奮する人間などいるだろうか。

美術館で「えつろ！これ、えろ！ちよ、ここ、18禁だろ！」とか言ってる人間がいたら、通報するだろうか？

美術館で「ふむ…これは、エロイですね。この扇情的な形が、ま

た」とか言ってる人間がいたら通報するだろう？

では、なぜ裸に我々は興奮しないのか。

- - 答えは簡単。隠されていないからだ。

どんな部位も隠されず、おおっぴろげに堂々と見せつけられること
によって、僕たちはエロさを感じないのだ。その凜とした態度に、
美しいと感じるのだ。

そもそも、【倫理問題的（略）】と口など、あまり変わらないのに、
僕たちは口に何も感じない。いや、感じる人もいるけど（僕）、一
旦置いておく。

まあつまり、僕たちは、全部が見えるより、体の一部分が露出され
ているほうが興奮するのだ。

しかしここで勘違いされたくないのが、今僕が述べた理由が、うな
じ等の部位をエロく感じるのとは違うということだ。これについて
は、また違う機会にでも説明しよう。

「さ、着いたよ」

と、僕が熱弁していたら、ピタッと、目の前の生肉・・・ゲフンゲ
フン。絶対領域（さっき語った生肉の部分）が・・・ゲフンゲフン。
目の前を歩いていた彼女の足が止まった。ここは...廊下の内装的に、
校舎の旧館だろう。ふむ、結構歩いたみたいだ。

とりあえず僕は一旦（ここ重要）彼女の脚から目を外して、彼女が
案内してくれた場所が旧館のどこか確認する。

そして僕の目の前には、旧将棋部の部室で、

「相談...部？」

『相談部』という新しいプレートが掛けられた、古びた部屋があっ
た。

「失礼するっすー。部長、例の横島君を連れてきましたあ」

僕の前を先行していた、絶対少女（名前が分からないので、便宜的
にこの名前で呼ぶ）は、けだるそうな声で、目の前のドアに向かっ

て話しかける。

余談だが、ドアというものも良いものだと思う。

ドア。それはつまり、自らのプライベートを晒す穴。ドアのなかには入れるかどうかで、相手が自分をどう思っているのかが分かる、便利な器具だ。

ちなみに僕は、身内以外の家上がった事は一度もない。

具体的な例を上げると、同級生が家に入れてくれなかった時に、「あれか、焦らしプレイかな」とか思って、ドアの前に二時間ほど立っていたら、その同級生の父が僕に千円を渡して「帰ってくれ」と懇願されたことがあったかな。

それ以来、誰かの家に行くということをやめた。

代わりにのぞき始めた。

閑話休題。

「あの、君。僕はなんでここに連れて来られたのかな？」

僕は、本当なら最初に聞くべきだったことを聞く。なんで聞いてなかったんだらう。ああ、絶対領域のせいかな。

彼女は、僕の問いを聞いて、

「ちよつと、この相談部に入部してもらいたくてね」と答えた。

「ああ、入部ね。なにげに僕スペック高いもんね。。。つて、入部!？」

「入部だつて!?!?そんな!?!？」

そんな重要なことを、この子は黙っていたのか!

それに、部活はキツイ! そうすると僕の、日課が!

「んー? 横島君つて帰宅部っしょ?」

そんな僕の内心も知らずに、彼女は聞いてくる。

首を横にかしげる仕草とか、本当可愛いなあ!!

「ただ、

「いや、そうだけど…。でも、放課後は暇じゃないと、僕は…」

「?」

彼女は疑問符を浮かべる。実際には見えないけど浮いてる。

「陸上部の練習が、、見れないじゃないか！！！！」

陽の光と、男子生徒の視線を集めてやまない、あの濃紺のスパッツが……見れなくなってしまう！！

トラックを走り終わったときに頬を伝う、健康的な汗が！

走る前の、女子同士の柔軟が！

走ってる真っ最中の苦悶の表情も！

休憩時に、大ぴろげに広げられる、脚も！

部活などに勤しんでいたら、見れないじゃないか……ッ！！

僕の、唯一の、青春がッ！！

「…悪いけど、僕には…入部することは…」

ガチャッ。

僕が、絶対少女に入部できない旨を伝えようとした、その瞬間。

いきなり、相談部の（プレートが掛かっていたし、多分部室だろう）

ドアが開いた。

そして、中から、

「ん。連れてきたか、三富士君」

ドアから出てきた彼女をあらわせる言葉は、『美しい』しか無かった。

ただ美しい。どうしようもなく、美しい。

凜とした顔つき。雪のように白い肌。全てを呑み込む漆黒の髪。小

さい口から出た、透き通っているが芯のある声。e t c …

全てが『美しい』だった。

しかし、それゆえか。

彼女はどこか虚しかった。

「あ……」

僕は声にならない声を上げて、彼女を見つめ続ける。

「いや、正確には、「目を離すことが出来なかった」
体が、僕の意識を無視して、彼女から目を話すことを赦さなかつた
のだ。」

そして、そんな不可解な現象を前に言葉も出ない僕に向かって、彼
女は言った。

「相談部へ、ようこそ」

にゅづぶ！(平仮名の方が可愛いだろう?)(前書き)

相談部。それは僕のハーレム!!

……じゃなくて、変態の巣窟

にゅーぶ！(平仮名の方が可愛いだろう?)

「私は、丘栗《おかしずく》。役職は相談部部长。趣味は支配だ！」
『彼女』は自信に満ち溢れた顔で、高らかに言い切った。

相談部の中から出てきた『彼女』に、無理やり中に入れられ、僕は
イっちゃいますうううううう！！

- - -じゃなくて、僕は困っていた。

なにせいきなり高らかに自己紹介をされたのだ。誰でも困るだろう。

「あ、私は、三富士文《みふじふみ》っす。趣味は百合っす」

そしてその後、絶対少女も自己紹介したが、なんというか印象に残りにくかった。

『彼女』のいきなりの自己紹介のせいで、僕は少し混乱してしまっ
たからだ。

僕はあそこまで堂々と自己紹介できた奴を一度も見たことなかった。
そして多分これからもないだろう。

そう思わせるほどに、『彼女』は堂々としていた。

まるで、自分に恥じるべきところなど、どこにもないといった感じ
で。

それが、『彼女』の美しさを更に加速させていた。

「横島氏、君の変態さを見込んで、お願いがある」

『彼女』は僕の混乱などお構いなしに話を進める。

僕の事情など知ったことではない、というように。

- 否。僕の事情などどうでもいいのか。

『彼女』にとっては、自分が全てなのだ。

趣味が支配なんて馬鹿げた物も、それ故にだろう。

だから今、僕を支配しようと侵略中なのだ。

「…入部ですか？」

僕は混乱する頭を必死で抑えつけ、どうにか聞く。

「ん。そうだ。話が早いな」

彼女は満足げにうんうん、と頷く。その姿さえ様になるのだから、

『彼女』は本当に人の上に立つような人間なのだろう。

しかし、この圧倒的自信はどこから来るのだろうか。

「さて、じゃあ、この紙に名前を…」

彼女は自らのバッグから一枚の紙と、ペンを取り出し、渡してきた。

僕は返事してないんだけど……。

「あの、、、僕、、、陸上部の練習を…」

「ん？」

「いや、陸上部が…」

「ん？」

「スパッツだよ!!! スパッツが見たいんだよ!!!」

「ん？」

……圧殺された。。。イジメレベルだったたる今の。

なんか、女王様って感じだなあ。

ハアハア。

「そんなに、スパッツが見たいのかい？」

僕が女王様という単語に悶えていると、『彼女』が口を開いた。

「みたいですよ!!! 男の夢ですよ! いや、本当ならブルマがいいけど!

」

ぐっと拳を固めて、僕は叫ぶ。

スパッツが見たくない男なんて、そんな男じゃない!

スパッツこそ、身近にある男の夢だ、と。

そう僕が熱弁すると、『彼女』は「ふむ」と声を漏らし、

スススつと、

僕の目の前で、

スカートをたくし上げていた。

「うおおおおおおおおお！……！！！」

僕は思わず雄叫びをあげていた。

だって、スカートの中には、

「ブルマ……ッ！！！」

ブルマが履いてあったのだ。

……たくし上げブルマ！！僕は今、新たな境地を開いてしまっ
た！！

肉の食い込み、全てを飲み込む濃紺！そして普段は見えない内腿！

！！！！！！！！

こんなことがあつていいのだろうか！？

「ど……どうだい？私のお願ひ、聞いてくれるかな？」

ここで聞こえる『彼女』の声。

ひ……卑怯な！！こんな事されたら、……！！

聞かない訳にはいかないじゃないか。

「入……部させてください」

こうして僕は相談部に入った。

そこが変態の巣窟とは、知らずに……。

にゅづぶ！(平仮名の方が可愛いだろっ?) (後書き)

次回、メンバー紹介

日曜日ッ！・1・（前書き）

僕の日曜日を公開しちゃっよ！

みんな、僕を見てっ。はあはあ

下腹部に尋常ではない重さを感じて、僕は目を覚ました。

「…あ？」

僕は寝惚け眼のまま、重さの正体を探る。

『ああ、この上に美少女が乗っているのかな？』
そんな期待を抱きながら。

「わ…私、召喚されはしえっ、馳せ参じました、あなたの使い魔です。なんなりとっ、ご、ご命令を…っ！」とか

「あら、もう起きちゃったの？ふふ、仕方ない子ね。これから【倫理的問題によりカットさせていただきます】」とか
そんな展開になると、期待を抱いたよ。

- 現実、十キロのダンベルだったけどね。

なにこれ、おかしくない？なにゆえ僕はダンベルに起こされてるの？なんで妹とか幼馴染に起こされてないの？

「あ、起きちゃった？」

僕がどうしようもない現実に打ちのめされていると、ベッドの横から、女の子の声が聞こえてきた。

うつひょーい。僕の朝の目覚めは、女の子と一緒にだーい。

とりあえず、声の主の女の子に挨拶をしなきゃね。

「おはよう、悠。今日も可愛いね」

「な…何言ってるの！？…恥兄のバカ」

「ん？なんかラブコメっぽい雰囲気だったのに、ただの一言でぶち壊された気がする」

「え？だって恥兄は端兄でしょ？」

「どっちも『はじにい』って呼ばれてるのに、貶されてる気がする

…」

「あはははは」

…おっと、つい愛しい愛しい悠との会話に夢中になってしまった。

ちゃんと紹介しないとね。

黒髪ショートの子、活発そうな女の子。高一だというのに全く育たない幼児体型は、常常僕の心を奪う。

さて、そんな少女がなぜ僕の朝に立ち会っているのかというと、それはもう聞いたら発狂しそうなくらい羨ましい理由である。

…まあ、つまり、彼女は僕の家に住みこんでいるのだ。

僕の従姉妹として。

うふふふふ。どうだい？羨ましくて発狂しただろう？

「はじ兄、、なんで一人で笑ってるの？」

「いや、悠みたいな可愛い子が、同居してると思つと、なんだか優越感が沸き起こってね」

「……………ばーか」

がちやっ、と僕の部屋のドアを勢いよく開けて、彼女は出ていった。僕はとりあえずダンベルを床に置いて、ベッドから出る。

そして、伸びをしながら考える。

- -悠はなにに僕の部屋に来たんだろう？

「母さん、僕の分の朝飯は…？」

一階に降りてダイニングに向かうと、その食卓の上には、真っ白な皿とパンが、三枚しか置かれてなかった。

両親と悠の分だろう。うん、そこまではいい。

で、僕の分は？

いやいやいや、さすがに実の息子である僕の、朝飯がないなんてことはないだろう。

で、僕の分は？

「……………」

母さんは何も答えない。

え…？なにこの沈黙。真面目に僕の朝飯ないの？

「……………」
鋭い視線をぶつけてみるが、母さんは、やはりなんの反応も示さない。

ちよつと、いい加減にしてくれ？え？ないの？

そんな僕らの雰囲気を感じてか、悠は、

「あの、はじ兄、私の半分あげるよ」

「あら、悠ちゃん。遠慮しないで。アレに優しくすると、すぐつけあがって面倒よ」

「おい！！今、本音出ただろ！！アレってなんだよ！僕息子！！」
くそ、この母親。血のつながった息子をアレ呼ばわりだなんて、あんまりだ！

「うるさいわ、横島さん」

「ここにいる人、ほとんど横島さん！！そこまでして僕を息子と認めたくないの！？」

「最近の子はヒステリックでいけない。もっと落ち着きなさい」
「誰のせいだよ！！！」

「……………あ、そつだ。あなた、海外に行くってくるのは、どう？今のうちに世界を見ときなさい」

「そんなに僕を家から追い出したいの！？」

「……………」
「無言で目をそらすなあああ！！！」

この親！！児童相談所に逃げ込んでやる！児童最高！！！！！！
しかし、朝飯について嘆いても仕方がないので、僕は母さん(?)から500円を奪い取って、漁サンを履いて外に出る。

僕は基本的にポジティブなのだ。

「あの、馬鹿親！！僕に悠を譲ってください！！」
我が自宅に向かって大声で叫ぶ。

こうでもしないと、やっていられない！

僕は、怒りやら、悠への劣情やらを原動力に、自転車を漕ぎ出す。

ひたすら夢中に漕いだ。

・・・だから気付かなかった。500円として渡されていた筈のコインが、どこの国がよく分からない通貨だったことに。

……ばかやろっ！！

日本円の五百円を取りに家に帰ると、リビングでは両親と悠が話していた。どうやら僕の話らしい。

「あの、宗の事なんだけど…」

声質的に母さんかな？これは。

僕はリビングの扉に掛けていた手を外し、代わりに耳を寄せる。昔、悠の部屋を盗聴 - もとい、兄として（従兄弟として？）悠の生活管理する時に用いた手段だ。

機械を買うより断然安いし、扉越しとはいえ、生で聞こえるのが強みだ。…だが、親に見つかりと死にたくなるし、殺されるから最近止めた。

「宗か…。アレは、、、」

お次は父さんの声だ。

なんだ？この両親は2人も僕をアレ呼ばわりしてるのか。

「はじ兄がどうかしたの？」

「ああ、悠。……変に思わないか、宗の事」

「変？」

「変、態とかさ…」

ちよっ、直球すぎるよ、父さん！！

なんで肉親にまで変態呼ばわりされないといけないんだ！！

「うん、そうだね」

つて、悠！？あっさりすぎない！？

「やっぱり悠も、そう思ってるわよね！！…どうしようかしら」

「アレには彼女とか出来るだろうか…」

「はじ兄に、彼女？…できないよ！！うん」

悠がさつきから僕にキツイのは、なぜなんだろうか。実は嫌われてるんだろうか、僕。

「どうにか治らないだろうか、アレ」

僕は病気じゃないよ、父さん!!

「…無理よ。保育園の頃から変態だったもの」

保育士の胸を見ようとするのは、当たり前だろ？それを言動に表したかどうかだよな。

結局皆変態だよな。

「とうか、いい加減に僕入らないと、明日から顔あわせにくくなっちゃう…」

…こつも変態変態言われると、ね。

僕は扉から耳を離して、リビングに入る。

その時の三人の視線が、妙に身に染みたことは、言うまでもない。

「はじ兄、入るよー？」

コンコン、というノックの音と共に悠が部屋に入ってきた。

こういうのは、ちゃんと返事を待ってから、入ってくるべきだと思う。まあ、どうでもいいことなだけだ。

「んー？どうかした？」

「いやさ、昨日、帰り一緒じゃなかったじゃない？」

…ああ、そうそう。僕と悠は中学の時から、一緒に登下校してるのだ。

まあ、仲いいし（重要）一緒の家だし（重要）学校も、学年が違うだけで同じだし（重要）

「ああ…うん」

だが、昨日は『相談部』云々で、帰る時間帯がずれてしまったわけだ。

いや、しかしだな!!生ブルマを見るだなんてイベント、見逃せるわけじゃないじゃないか!!

「ブル…部活だったんだ」

先程、変態変態言われていたので、ブルマとは言わないが、すると悠は、

「はじ兄が部活…？うー」

と、唸って、その姿が可愛い！！この仕草だけで、アルバム一冊はいける！！

「はじ兄…、部活ってなに？」

「相談部って知ってる？」

悠の問いに、僕が『相談部』と言った途端、彼女は納得したように首肯した。

え、なにその反応？

「悠…？相談部って有名なの？」

恐る恐る聞いてみる。

なにせ僕は、一回も聞いたことない部活だったから、実際どんなところか知らないのだ。

よくそんなところ入ったな、とか言わないで欲しい。

- -そして彼女は、僕の問いに、

「相談部はね。別名、変態部って言われてて、変態の隔離病棟みたいなどこなんだ」

僕は初めて、ブルマを恨んだ。

部員 - 1 -

「おお、きたか！横島氏」

放課後、相談部に向かうと、椅子に座っていた部長・丘おかじょうくが満面の笑みで僕を出迎えてくれた。変態病棟とか言われているのを忘れてしまつくらい美しかった。

「はい。部員ですしね」

「いや、ね。入部した人間が、そのまま入部し続ける事は珍しいんだ」

へえ。意外だなあ。こんなに美人の部長がいるのに。

「…皆、部員を紹介すると、次の日からこなくなるんだ。。なぜだ」

ガツクリと首を落とす部長。

多分それで来なくなった人達が、変態部とか吹聴したんだろうな。

…そうだ、ここ『変態部』なんだ。

「だがっ！！」

いきなりバツ、と部長が立ち上がる。

そして、ガシッと腕を掴まれた！うおおおおおおお！！！！

「横島氏！君ならこの相談部の、立派な一員になると、私は信じてるよ！」

「はい、喜んで！！」

「おお、そうか！では、相談部の部員を紹介しよう！」

彼女は荒々しく、掴んだ僕の腕を振る。

- - 僕って軽々しく返事しちゃうなあ。

でも、部長のこんなに無邪気な姿が見れたから、良かったかな。うん。

「さて、まず、君と同学年の、三富士だ」

彼女は、部室に設置されているソファの前にやってくる。

そのソファの上には、一昨日僕をここまで案内してくれたあの娘がいた。

「三富士氏じゃないんですか？」

「いや、私は女性には氏をつけないんだ」

そんなどうでもいい事を部長と話していると、ソファに寝ていた彼女は目を覚ました。

「……ん。どうかしたんすか？」

彼女は「目」だけをこちらに向けて、口を開いた。
だるそうだなあ。

あと、制服のまま寝ると、いい案配で制服が着崩れて、色気を感じるなあ。

緩いシャツの襟口から見える、鎖骨。

さらに、そこに開いた襟口と素肌との洞窟。その先の見えない暗闇を、突き進んでしまいたい衝動が湧き出るが、必死に抑える。

そして、そこから視線を下にずらして、スカート。

これがまたいい味を出している。

少し捲れ上がったその布の下には、皆のオアシス、そう、アレがある。

それが見えるか見えないかのギリギリの位置をキープし、そこから目を外すのは至難の技だ。

また、スカートが捲れ上がることによって、普段より大きい面積の太ももを曝け出すことになる。

つまり、ニーハイと太腿の、黒と白のコントラストだ。

このキツチリとした境目が、さらに僕の心を掴んで離さない。

……だが、まだそれだけではない。

そう、乱れた髪と、首筋を伝う珠の汗だ。

ここまでコスチュームや身体ばかり注目したが、この二つの要素を

除いたら、それはガクンと輝きを失っただろう。
乱れた髪、そして汗。この二つが演出するもの。それは身体の火照りだ。

この火照りが加わることによって魅力が段違いに上がる。

最後に、彼女特有の気だるさも相まって、その光景は

『至福』

この二文字が・否、この二文字こそ、相応しい。

「三富士さん。グッジョブ…ッ！」

僕は今、猛烈に感動している！

「は、はあ…？」

「ん？横島氏？大丈夫かい？」

二人揃って、奇異の目で僕を見る。

「あ…うん。大丈夫です」

僕の様子に、彼女らはさらに首をかしげたが、追及はしてこなかった。

「では、紹介しよう。彼女は三富士文^{みふじふみ}。君と同じ年で、7月14日生まれ。で、百合だ」

「そつすねー」

「後は、三富士。少し喋れ」

「…うーす」

部長と三富士さんは、そんなやりとりをして、三富士さんが遂に立った。

「…ばかやろう。」

「えーと、三富士文。百合が好きで、経験人数は5人。まだ処女です。よろしくっす」

三富士さんは、僕に一礼して、またそそくさとソファに寝転んだ。ここまで流れるようにソファに寝転ぶ事ができるのは、この学校で多分、三富士さんだけだろう。

何年間この動作をしてきたのか、最早それは達人の域であった。

…さて、本題に入ろう。

「百合：だと！？そして、出会って二日目の奴に処女宣告だと！？」
重要だ。

この少女はなにを考えているんだ！

「んー？今時、同性愛者は珍しくないっすよ？」

「そういう問題じゃないよ！ー！というか、そこじゃないよ！」

「どこっすか？処女っすか？」

「そこだよ！ー！三富士さん！いきなりそんなこと言ったら、危ないでしょうが！ー！」

「…なにがっすか？落ち着きましようよ？」

「落ち着けないよ！ー！ほかの男子に、そんなこと言ったら勘違いされるからね！？」

「勘違いっすか」

「こいつ、俺のこと誘ってんじゃねえか？的な勘違いだよ！」

「でも私、女の子にしか興味ないし…！」

「それで傷つく人もいるんだよ！ー！これ以上ない『勘違い乙』だよ！立ち直れないよ！ー！」

「…何情報っすかぁ」

「ソースは僕だよ！ー！」

小学校の頃、「優しいね」に騙されて、告白した僕だよ！馬鹿！僕の馬鹿！

「はぁ…。分かりました。そこまで言うなら、以後気を付けます…」

三富士さんは、納得いかない顔で言っつて、それを最後に意識をブラツクアウトさせた。

うむ…。大丈夫かな…

そもそも、僕の前でこんなに無防備な姿を晒してる時点で、終わりだと思っただが…。

…すると、僕の苦悩を読み取ったのか、会長が、

「大丈夫さ。もし大丈夫じゃなくとも、それは彼女の問題だ」

「でも」

僕は食い下がってしまう。

だが、会長は自らの言葉で、僕の言葉を断ち切った。
「……君は『変態』なのに、優しいんだね」

小学校を思い出して、死にたくなった。

部員・2・（前書き）

天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず・・・

しかし、僕的には、人の下に人を作って欲しかった訳です。
だって、下からパンツが見えるよね。合法的パンモロだよね。

「さて次の部員だが」

部長は部室の中にある、カーテンで仕切られた部屋へ入っていく。なにげに広いんだよね、この部室。

「さあ、紹介しよう」

シャツと開けられたカーテンの内には、ソファが二個と、背の低いテーブルが一つ。

そして、僕から見て、左側のソファには、黒髪のお笑顔を顔に貼り付けたような男が一人、もう片方には、茶髪の背の小さな女の子一人と、ガタイのいい男が座り、何やらトランプをしていた。

その三人は、部長の声に顔を上げ、僕をまじまじと見る。

「そいつは？」

少しして、代表したように、三人の中のガタイのいい男が、僕を顎で指して、部長に聞く。

彫りの濃い顔で、どちらかというところ、鳶職でもやってそうな男だった。

「ああ、新しく入部した横島氏だ。……横島氏、こいつが三年の不二だ」

「へえ、こんなところによく入部したな。……よろしくな、俺は不二正義だ」

不二先輩は手を差し出してくる。

僕はその手を握り返して、笑顔を返した。

- - なんだ、ちゃんとした人もいるんじゃないか。

「はい、よろしくお願ひします。僕は横島宗です」

いや、良かった。変態だらけじゃないじゃないか。

やっぱり、どこにでも良心っていうのはあるものだなあ。

・・・と、思っていた矢先、それが起きた。

「ねえねえ、不二君。君負けちゃうよ」

いきなり、不二先輩とは反対側のソファに一人で座っている、黒髪の男が口を開いた。

そうか、そういえばトランプしてる途中で僕たちが入ってきたのか。・・・テーブルの上に散らばっているカードを見る限り、やってるのは大富豪らしい。

そうそう、ちなみにこの『大富豪』って言い方、地方とかによって違うらしいよね。

『大貧民』っていう言い方のやつね。

でも、大貧民だと、こう、

「お金がないから………。私……。これは、仕方ないことなんだ……。だって私、女（略）」

っていう妄想につながっちゃって、不謹慎だから、『大貧民』って言えないんだよね。

…あれ、でも『大富豪』も

「げへへ、お金がない？…ふん仕方ないな、じゃあ体で払ってもらおうか!!」

に、なっちゃって駄目だね。てへ。

「ほらほら、早く出そうよ」

黒髪の男は、更に急かす。

しかし、、、この男はなんとというか不気味だった。

なんでも知っているような余裕と、自分のことを何も悟らせない笑顔を携えたこの男は。

不気味だった。

「……部長。あの黒髪の人」

あまりに不気味だったので、僕は部長に耳打ちする。

決して、自分の口を部長の耳に近づけたかったとかじゃない。

あ、部長の髪、いい匂いするう。

「ん？ああ、黒井の事か。あとで紹介するから、ちょっと待て」
部長はニヤニヤしながら、黒髪と不二先輩を見ている。

ここまでニヤニヤが様になる人は、多分この世にいないだろう。
そう思わせるニヤニヤだった。

だから僕も部長を真似て、ニヤニヤする。別に、部長の顔を近くで見ていることに、ニヤニヤしている訳じゃない。断じて違う。

ニヤニヤ。

・・・と、僕がニヤニヤしていたら、

へええええん！しん！！

トランプをしている筈の場所から、奇声が聞こえてきた。

僕は先輩から目を外して、声の上がった方を見る。

そこには・・・！！

「な……………！？」

僕は思わず腰を抜かす。

だってしょうがないじゃないか。

目の前に、穴があいた紙袋を被った、ガタイのいい男がいたんだから。

「どうだい？面白いだろう？不二は」

部長は未だにニヤニヤしながら僕に言ってくる。

「ニヤニヤしてたのは、僕のこの姿が見たかったからか。」

「あれは、不二先輩なんですか…？」

あれが不二先輩だというのか。

人は紙袋一つであんなにも変わるものなのか。

あそこまで、

狂えるのか。

「まあ、見てろ。奴の凄いところはここからさ」

部長は愉快で堪らないという顔で、不二先輩だったアレを見る。

僕も、言われたとおりに目を向ける。

そこには、普通では有り得ない光景が広がっていた。

まさに、変態部の名にふさわしい光景が（やっているのは大富豪）。

「ふッ！…どうだあ？カツコイイダロ？」

「やっぱ、不二君はそうじゃないと面白くないよね…ッ！！」

「……………」

カードを持つ三者は、互いに睨みあう。

だが、それも一瞬。

…動き出す。

「はっ！」

一番の異常が。

彼は、右手の人差し指、中指、薬指の間に一枚ずつ挟み、テーブルに投げつける。

それは明らかに『遊び』ではなかった。

「……………」

次に、小さい女の子が、ゆっくり、カードを場に出す。

手札の枚数を見る限り、彼女が一番少ない。

だが、他の二人からは、圧倒的な『自信』しか感じなかった。

「ははっ。じゃあ、いかせてもらおうよ」

黒髪の少年は、自らの出したカードの効果で、場にあったカードを横へ流す。

そして、イカサマしたとしか思えない程に揃った、シークエンス（同じマークで、連続に連なった数字の三枚組以上のカードの集まり。階段）を場に出す。

場にいる人間は、その少年の顔を睨むが、少年の笑顔は崩れない。

少年のカードはあと一枚。

少年は自らの勝ちを確信した。皆、少年が勝つと思った。

- - ただ一人を除いて。

「ふふん。ふはははは！甘い、甘いぞ！！」

「!?!」

黒髪の少年は、笑顔を崩さないまま、……確かに動揺していた。

茶色い仮面を被った異常者は、笑みという仮面を被る少年を、押しただの。

彼は、自らの手札を全て場に出す。

出されたのは、6枚揃ったシークエンス。

しかし、そのカードの束は、

「…俺が出したシークエンスと、同じ柄じゃないか！！」

黒髪の少年は激昂する。

勿論、笑みを貼り付けたまま。

「……どうすんの？不二君。これは明白なイカサマじゃないか」

少年は一瞬で落ち着きを取り戻し、冷静に問題点を突く。

- 否、問題と言える事ですらない。これは、どうしようもないほどに、明らかなイカサマだ。普通に考えて、逃げ道などない。

「ふう。いいかい？黒井くん」

だが、異常者に普通は通じない。

彼は、自らのイカサマに、むしろ嬉々とした態度で、言った。
「勝てば、正義だ」

「なに言ってるのさ、不二君。君はここでイカサマ負けじゃないか
そのとおり。」

異常者・不二正義はイカサマとも呼べない暴拳をした拳句、自分
の勝ちだと言い始めたのだ。
あまりに常軌を逸している。

それでは、ルールも何もない。
否、彼にはそれが普通なのだろうか。

「違う違う。俺は最初に確認しただろうか？」
彼は言いながら、場に出ているカードを指でさして、
「このトランプを使う、と!!」

高らかに言い放った。

・ 異常者の言葉を聞いて、少年は停止した。
皆・少なくとも僕は・停止した。
そして、数秒。

後、少年は負けを認めた様に、自分の手札を場に捨てた。

「俺の負けかな。うん」

黒髪の少年は、ソファに横になる。

僕は、その一部始終を見届けてから、部長に話しかけた。

「……あの、不二さんって、誰なんですか？」

「はは。誰、か。そうだね。今の彼は、不二正義であって、不二正
義じゃない」

「……」

「これが面白いものでね！今の彼は、『正義』なんだってさ」

部長は、活き活きした目で、ソファの上に立ち上がっている彼を見る。

あれが、正義だって？あの、薄気味悪い異常者が？

「彼にとつて、正義は勝つんじゃない。勝つてこそその正義なんだ。」

「だから平気でイカサマもする」

「いくら悪と罵られようと、勝ち続ける限り、それは正義だそうだ」

「くつくつく。全く、本当にカッコイイじゃないか彼は！」

部長は腹を抱えて笑う。

部長はかつこいいと言う。

勝つことだけに価値を見出す、あの異常者を。

勝ちに何よりも妄執する彼を。

かつこいい、と。

「は、はは。なんですか、あれ」

「かつこよすぎるじゃないですか」

部長は嬉しそうに口を歪め、自慢げに言い放った。

「だろっ？我が部の部員は皆変態で、かつこいいんだ」

部員・2・（後書き）

全然ラブコメになる兆しがねえ！！

無理やりラブコメにする気はないけど！

ナチュラルにラブコメにしたい！

というか、今回、ついにコメディじゃない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8683y/>

僕(変態)と君たち(変態)の相談部

2011年12月4日01時53分発行